**説教20230709ローマ7：21-8：6マタイ11：25-30「高ぶることなく、ろばに乗って来るイエス」**

**この世の中には、高慢な人もいれば、謙虚な人もいます。怒りっぽい人もいれば怒りっぽくない人もいます。自分はこの社会で勝ち組のほうに入っていると思って安心をし、堂々とその人生行路を歩んでいる人もいれば、反対に自分はこの社会で負け組であり情けない存在で生きている価値もないと自己卑下しながら生きている人もいます。**

**このように個々の人を見ればその生き様や置かれた状況は人それぞれ、千差万別ですが、救い主イエス様から見れば全ての人が、「疲れた者、重荷を負う者」たちに見えていらっしゃることでしょう。**

**最近はことに、かつて勝ち組とか負け組とか言っていたけれど、そう言う言い方自体にどれほどの意味があったのか、という根源的な問いを考えさせられる事件や事故が多発して、私たち人間全体を悩ませ疲れさせています。**

**主イエスは、全ての人、一人ひとりの様子をよく見られて、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしのを負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである」とだれもに声掛けをされて、主イエスの救いへと招いて下さっています。**

**しかしながら、このイエス様の御言葉を聞いて救われる人は、残念ながら少ないのです。イエス様ご自身が言われています。この御言葉は幼子のようなものに聞かれてその心に届くのです。大人の人は、今自分が持っている知恵や知識で満たされて満足していては、かえってそれが重荷となって、その重荷をなかなか下ろすことが出来ないのです。**

**大人は、この世の中を歩んで行くためにたくさんのことを学び知恵や知識を得て、それに寄り頼んで人生を歩んできました。その人生の内で、家族を養い子供を育てた方々も多くおられます。でも、その人生の歩みが重荷だなあと思う瞬間がだれにもある、ということを主イエスはお認めになって、その上で、この「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」という救いの御言葉を誰にでもプレゼントしようとされているのです。**

**このことは、今日のローマ書の言葉を用いれば、肉的な安らぎはイエス様なしでも得られるかもしれないけれど、永遠に存続する霊的な安らぎは、イエス様によってしかもたらされることはない、と言うことであります。**

**この耳障りのよい「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」と言う御言葉は、後半部の「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしのを負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである」という御言葉とセットであり、両者を切り離してしまいますと、意味が分からなくなってしまいます。この後半部で主イエスは、私たちに、イエスから学び、イエスのために荷を担いで働きなさいと言われています。これは或る意味当然のことでありましょう。仕事なしの休みは、安逸であり堕落に繋がります。逆に、休みなしの仕事は、人生を奴隷状態に導くことでしょう。**

**この様に、主イエスはこの御言葉によって、私たちの果たすべき仕事と、お休み、つまり安息について述べておられるのです。**

**この救いの御言葉は、私たちが教会で日曜日に限って聞く御言葉では決してありません。私たちは、日々の仕事に疲れ、また生活に疲れて、夜な夜なこの主イエスの御言葉を聞いて、休まされ、霊的な安らぎを得て、眠りへつくべきであります。**

**眠りへつくべきと言う表現も、なんだか強い表現だなあと思われるかも知れませんが、私たちは、寝床に入って、イエス様に出会って癒されようとしても、そこにも又、苦難や試練があって、簡単に眠りへつくことが出来ないこともあるのです。**

**先週の祈祷会で学びました、詩編77編に、夜な夜な主イエスの救いを得ようとして苦悶するアサフの姿がリアルに描かれています。アサフは主イエスに向かって声をあげ／助けを求めて叫びました。そうすると、主イエスはアサフに耳を傾けて下さって、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」という御言葉をもってアサフに答えて下さったのでした。**

**このように、アサフは主イエスによって霊的な安らぎを得ることが出来たのでしたが、そこに至るまでのアサフの苦悶は深く長いものであったようです。**

**７７編３節以下をお読みします。**

**苦難の襲うとき、わたしは主を求めます。夜、わたしの手は疲れも知らず差し出され／わたしの魂は慰めを受け入れません。**

**神を思い続けて呻き／わたしの霊は悩んでなえ果てます。〔セラ**

**あなたはわたしのまぶたをつかんでおられます。心は騒ぎますが、わたしは語りません。**

**いにしえの日々をわたしは思います／とこしえに続く年月を。**

**夜、わたしの歌を心に思い続け／わたしの霊は悩んで問いかけます。**

**「主はとこしえに突き放し／再び喜び迎えてはくださらないのか。**

**主の慈しみは永遠に失われたのであろうか。約束は代々に断たれてしまったのであろうか。神は憐れみを忘れ／怒って、同情を閉ざされたのであろうか。」**

**さて、この世の歌謡曲にも夜の苦悶を歌った歌が数多くあります。それは演歌系の歌詞に多いようですが、このアサフの歌にも出て来ます、私の歌、私の霊の悩みを延々と吐露するような、の歌詞が、この世の歌謡曲には多いような気がします。そしてアサフも、神を求めながらも、そのような自分で自分を慰める自己憐憫の境地をさ迷ったようです。**

**しかし、信仰に生き、霊的に導かれるアサフはその境地に埋もれることなく、最後には、主イエスに引き寄せられ、霊的な安らぎを経て、主イエスの御業、奇跡、御働きを思い巡らしほめたたえながら、安らかな眠りへとつくことが出来たのでした。**

**アサフが、夜の時に体験をしたこのような苦悶や葛藤は、私たちクリスチャンにとっても、身に覚えがないことでなく、日々起こっていることでありましょう。**

**私たちが主イエスに引き寄せられて得られる、霊的な安らぎは、もちろん深いものであります。薄っぺらい、すぐに失われるようなものではないのです。ですからその安らぎを得るための道のりも、深い苦難と葛藤に満ちたものであるということは、理解されることでしょう。又その苦難と葛藤の体験の中で、私たちの信仰はより確かなものとなり、主イエスの御言葉は益々、一人ひとりの内に豊かに根付くことになるのです。**

**私たちは「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」という主イエスのこの御言葉が軽い御言葉ではなく重い御言葉であることを再認識させられていますが、それでも、私たちが、疲れることなく、この御言葉に聞き従って行くためには、後半部で語られています、主イエスから学んで、主イエスのを負うということの中身についてよく知っておくことが大切であります。**

**主イエスは全ての人々にこの御言葉をプレゼントしようとされていました。それは勿論地上生涯で出会われたファリサイ派の人々や律法学者たちとて例外ではなかったでしょう。しかし、彼らは当時の世の中の指導者であり、傲慢であったので、この御言葉を受け取ることが出来ませんでした。その傲慢な姿は、私たちが良く知っている処でありますが、彼らは、御言葉を受け取らないどころか、何とかして、主イエスを亡き者にしようとして、その命を付け狙ったのでありました。救い主イエスを殺そうとするのは、彼らがイエス様が救い主であるということを知らなかったからです。彼らは傲慢でイエス様から学べなかったのでその事実を知らなかったのでした。そして当然の如く、彼らには安らぎが与えられることはありませんでした。彼らはイエス様のために働くどころか、その正反対のことをしていたのですから。**

**この様に、御言葉によく聞き、学んでいきますと、主イエスの言われることが良く分かり悟らされます。**

**しかし傲慢なファリサイ派の人々や律法学者の中にも例外的に、主イエスの御言葉を聞き、御言葉に学んだ人が何人か居りました。その一人が、パウロであります。彼は当初、イエスとその信者たちを迫害して、命を付け狙う者でありましたが、或る時、主イエスの「サウロよ、何故私を迫害するのか」という御言葉を聞き、回心に導かれ、それから、主イエスに学び、主イエスのために働く者へと変えられました。**

**パウロが、今迄自分がその命を奪おうとしていた方こそ、救い主イエス様であるという事実を知ったとき、かれが受けたショックは如何ばかりかと想像されます。そして、このパウロの身に起こりました、主イエスに出会い回心をしたという出来事は、今の私たちに大いに教訓になると思います。**

**今、イエス様はどこに居られるのでしょうか。もちろん、イエス様はどこにでもおられるお方ですから、教会にもおられ、家庭にもおられ、職場にもおられ、又、ストリートにもおられるでしょう。そして私たちをいつも見守っておられることでしょう。ところが私たちはと言いますと、回心前のパウロの様に、主イエスのお姿を見失ってしまっている、その救いの御手を見失ってしまっているのではないでしょうか。先週、主イエスの『はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』という御言葉を聞きましたが、この様に、私たちは取るに足りないと思われるところに居られる主イエスを、見失ってしまいます。**

**私たちは主イエスによく学び、主イエスをよく知ろうとしなければ、又、主イエスのために働くことも難しいのです。**

**旧約聖書のエステル記に記されていることですが、ユダヤ人として、ペルシャ王のおきさきとして抜擢され、宮廷で何不自由なく暮らしていた、エステルというユダヤ人の王妃がいました。彼女のもとに、或る時、ペルシャにいるユダヤ人を滅亡させるという策略が進行しているので助けてほしいという手紙が来ました。その手紙には「この時にあたってあなたが口を閉ざしているなら、ユダヤ人の解放と救済は他のところから起こり、あなた自身と父の家は滅ぼされるにちがいない。この時のためにこそ、あなたは王妃の位にまで達したのではないか」としたためられていました。宮廷で王様に囲われてに過ごしているエステルは、何もしないで今の安穏な立場を保つか、或いは国中のユダヤ人のために行動し働くのかの二者択一の選択を迫られました。そして彼女は今の安穏を選ばず、ユダヤ人たちの解放と救済のために働く方を選びました。そして彼女は最終的に、ペルシャ王をも味方に付けて、この働きを成し遂げたのでした。このお話で主イエスがエステルの果たすべき仕事のために用意した軛は、かなり大きく立派な物であったことでしょう。しかし、主イエスはその人その人に合った軛をその都度用意して下さっています。問題はその軛の大きさや立派さではありません。私たちはその都度主イエスから与えられる自分に相応しい軛を自ら背負って、主イエスのために確実に働く者たちとされたいと願います。**

**祈ります**

**父なる神よ、あなたは、この世に御子を遣わし、私たちに霊的な安らぎを与えて下さいました。そのはかり知ることが出来ないお恵みに感謝しあなたを賛美します。私たちは今、この世にあって、試練に立たされていますが、いつもその安らぎを忘れることなく、安心していられますよう、信仰・希望・愛を常に恵んで下さい。**

**この世にあって、私たちの肉体は滅びゆくものですが、私たちの内に宿るあなたの聖霊は滅びることがありません。どうか私たちが常に聖霊に満たされ、聖霊によって働き、遂に永遠の命へと至ることが出来ますように。**

**今、悲しみ、苦しみ、絶望のうちにある方々を覚えます。その方々の処へと、あなたの救いの御言葉が届けられます様に。又、その為に私たちがよく用いられ、働くことが出来ますよう、それぞれに相応しいくびきをお与えください。**

**私たちがそれぞれにあなたから任されている仕事は小さく取るに足りないものでありますが、折が良くても悪くてもその仕事に働き続けることが出来ますよう励まして下さい。それぞれの小さな業を、あなたが取り纏め、人間がはかり知ることが出来ない大きな御業を私たちに見させてください。**